

書 評

Paul Spencer. *The Pastoral Continuum: The Marginalization of Tradition in East Africa*. Oxford: Clarendon Press, 1998, 302p.

今年の夏、ケニアを中心とする東アフリカ一帯に大規模な旱魃が発生し、多くの人々が食料不足に陥っているというニュースをご存知の方も多いだろう。

アフリカ大陸には、降雨量が少なく農耕に適さない乾燥地域が広がっている。牧畜民と呼ばれる人々はこうした地域で、主に家畜に依存して生活している。彼らの生活は、人間が直接摂取することができない植物資源を、家畜を媒介としてミルクや肉などに変換することによって成立している。「牧畜民」と呼ばれる人々も、実際はある程度農耕もおこなっていることが多いのだが、アフリカの人口のうち、およそ1～1.5億人が主として家畜に依存しながら生活していると言われている。

従来、いわゆる「伝統的」な牧畜は、飢餓や旱魃、砂漠化を引き起こす、環境破壊的で非合理的なシステムであるという考えが広く受け入れられてきた。そしてこうした前提にたって、「伝統的」な牧畜民の経済を市場経済に組み込み、旱魃に耐えうるように「近代化」させること、そして砂漠化をひきおこすような環境利用を防止することを主眼とした開発援助がおこなわれてきた。しかしその期待された効果は、今のところ十分に得られて

いるとはいえない。こうした状況に対し、主に人類学の立場から、アフリカの牧畜は、乾燥地域という不安定な自然環境に対して合理的な適応を遂げたものであるという報告が提出されている。現在は、むしろ後者の見方が定着しつつある。

ハースコビッツの提唱する「東アフリカ・ウシ文化複合 (East African Cattle Complex)」の概念 [Herskovits 1926] に代表されるように、従来の人類的な研究において牧畜民は、家畜に対し生態学的側面だけではなく文化的・社会的にも高い価値をおく「伝統」的な生活の信奉者として描かれてきた。また、現代史的文脈においても、そうした「伝統」は、変容を前にして破壊されていく過去の秩序として描かれてきた。

これに対し本書 *The Pastoral Continuum* は、牧畜民が近年直面している状況に対する彼ら自身の「伝統」の弾力性 (resilience) を強調することを主題としている。スペンサーは「伝統」という概念を、人々が変容に直面し、それに対処しなければならないときに参照すべき「知識や経験のプール」としてとらえている。そうした知識や技術は、その時々、年長者たちによって保有されており、それゆえ「伝統」は彼らの不断の再解釈にさらされながら存在している。スペンサーはその「弾力性」を、人類学に限らず既存文献からのデータを広く援用しつつ、まさに博覧強記の筆で検証していくのである。その検証の結果浮き彫りにされていくのが、本書のタイトルにもなっている「牧畜連続体 (Pastoral Continuum)」という概念であり、それは先の

「東アフリカ・ウシ文化複合」に比べて、よりダイナミックで有効な道具立てになっているといえる。

さて、内容の紹介に進む前に、著者であるスペンサーとその業績の紹介をしておきたい。スペンサー (Paul Spencer) は1932年生まれ、イギリスの人類学者である。彼はケニア中北部のマー系 (マサイ系) ウシ牧畜民サンプルに関する人類学的研究に長年従事してきた。1965年に刊行された著作『サンプル—遊牧民の長老支配の研究』では、サンプルの年齢階梯制が詳述されている。サンプルの男性は、10代は牧童として少年期を過ごし、その後割礼を受けて戦士 (モラン) の時代を経、30代に一斉に結婚し長老となるという年齢階梯制をもっている。サンプルの男性にとって、戦士の時代は人生のうちでもっとも華やかな (おしゃれで女性にもてる) 時期であると同時に、自分たちのウシを他集団から防衛するという重要な任務を担う期間でもある。それにもかかわらず彼らは、長老によって政治的な決定権から阻害され、結婚を禁じられるというある意味では社会の外におかれた存在である。長老たちはモランの結婚をコントロールすることによって、彼らを政治的に排除しつつ管理している。スペンサーはこの年齢階梯に注目し、長老と戦士が常に緊張関係にあるという、サンプルの独特な政治体系を描き出しているのである [Spencer 1965]。その後1973年に刊行された『同盟関係にある遊牧民—ケニアにおけるサンプルとレンディーレ間の共生的発展』では、サンプルと、その北東部の乾燥地帯に居住するラク

ダ牧畜民レンディーレとの間の民族間関係に注目し、両者が人と家畜の交換によって分かちがたく結びついている状況が記述されている。この時点ですでにスペンサーは、ひとつの民族はシステムとして完結しているとみならず「一民族主義的民族誌」から、むしろ複数の民族の共生状態に注目した民族誌へとその視点を移しつつあった [Spencer 1973]。「牧畜連続体」とは、このような、牧畜民以外にも含む複数民族がダイナミックに相互作用しつつ、全体として共存している状態を指す概念であるといえる。この概念は、以上述べたようなスペンサーの研究史からの自然な帰結であり、その意味で彼の現在の到達点といえよう。

本書は3部構成になっている。第1部は「東アフリカにおける牧畜社会の諸相 (The Dimensions of Pastoral Society in East Africa)」と題されており、牧畜社会の弾力性を、一夫多妻制および年齢階梯制というトピックに焦点を当て、諸文献からの民族誌的データを援用して検討している。第2部「牧畜的ニッチへの適応と便宜主義: バリンゴ湖のチャムスの事例から (Opportunism and Adaptation to the Pastoral Niche: The Case of the Chamus of Lake Baringo)」では、ケニア西部の牧畜民チャムスをとりあげ、第1部での考察を踏まえて、牧畜連続体の「伝統」が植民地前から植民地統治期そして独立以降という歴史的なパースペクティブの中でどのように変容していったかを、やはり彼らの年齢体系を指標にしながら記述している。第3部「牧畜世界の周辺化 (The Marginalization of Pastoralism)」

では、近年の東アフリカ牧畜民をとりまく深刻な状況について考察し、牧畜的「伝統」の周辺化と牧畜民の将来という本書の主題へ立ち返っている。

以下、各部の内容を順を追って紹介することにしよう。

東アフリカの牧畜諸社会では、家畜群と家族の共生的な発展がひとつの主要な命題である。家畜に生計を依存している以上、家畜群の増大なくして家族の発展はありえない。第1部においてはこの点が注目され、結婚に際する女性と「婚資としての家畜」の交換が、単なる社会的交換に留まらず、家族と家畜群の共生的発展プロセスを支える重要な機構としてとらえられている。彼らは家畜群を増加させ、それらは結婚の際に婚資として支払われる。そして子供を増やし、その子が男性であれば労働力を、女性であれば婚資としての家畜を手に入れることができる。また、男性が成人し、独立した世帯をかまえるためには、彼と彼の家族を養う家畜が無ければならない。牧畜民の家畜群増大に対する欲望は、こうしたプロセスのなかで果てしなく追求されてゆく。

しかし家畜群と家族とは無限に増大していくわけではない。こうした地域では旱魃や略奪などの災害がつきものである。災害がおこれば、家畜の大幅な減少あるいは全滅により家族の規模も縮小し（さらには牧畜そのものが放棄されてしまう場合もある）、その後の平穏な時期に家畜群と家族はゆっくりと増加してゆく。このような増減を繰り返す推移をスペンサーは「鋸刃状の推移（Sawtooth

profile）」と呼んでいる。また、このような家族と家畜群の共生的発展のために、近隣の農耕民や狩猟採集民などの他集団との物品の交換や人の移動が盛んにおこなわれてきたことも指摘されている。

牧畜民にとっての至上命題が家畜群と家族の共生的発展である以上、そのプロセスにおいて重要な、資源として女性を考える場合、その分布状況が分析されなければならない。スペンサーは東アフリカ牧畜諸社会における一夫多妻に関する資料から、男性の年齢別の妻の数を比較している。それにより、民族によってさまざまなパターンがあるものの、東アフリカ牧畜諸社会においては、サンプルのような長老支配の傾向が共通にみられるということが統計的に明らかにされている。家畜群と家族の発展のプロセスにおいて鍵となる資源としての女性の配分が長老たちによって管理されているということは、牧畜諸社会の生産様式を理解するためには長老支配の根本となっている年齢体系を理解しなければならないということを示唆する。

第1部のクライマックスともいえる東アフリカ牧畜諸社会の動態に関する分析では、ウガンダ東部のジェエにおける年齢体系の事例から論が進められる。ガリバーは、ジェエの年齢体系は崩壊寸前であったと報告している[Gulliver 1953]。ジェエの年齢体系は「世代組 (generation set)」という形をとっているのが特徴である。世代組では、1人の男性の息子たちは、すべてつぎの年齢組に所属してはならないという規則が重要である。ところが、この規則をそのまま続けると、各年齢

組の重複部分がどんどんおおきくなってしまふ。このため、ジエの世代組による年齢体系のサイクルは原理的には数世代で機能しなくなるものとして考えられていたのである。しかしスペンサーは、サンプルのサイクルを参考にした年齢体系の理想的モデルをシミュレートし、(あくまで仮説としてではあるが)ジエの年齢体系には論理的な矛盾がないことを指摘した。そしてガリバーが報告した「年齢体系の崩壊」は、単に世代組の更新期の混乱に過ぎないことを示唆している。スペンサーはサンプルにおける長老支配に関する研究から、長老と戦士の間の対立は日常的には潜在しているが、それは階段が更新され長老から戦士に権力が委譲される時期に表面化し、社会的混乱が生ずることを指摘している。しかし同時に世代組は、この混乱の結果生じる、新たな秩序を生み出す弾力性によって支えられているとも言える。ここで取り上げられたジエの事例は、ガリバーの報告のような共時的視点によって、恒久的な文化変容が安易に「発見」されてしまうことへの批判としても読むことができるだろう。

以上のように第1部では、家族と家畜群の共生的発展と、それを可能にするような女性やものの交換(自集団同士とはかぎらない)、そしてそれらを管理する長老制を基盤とする政治体系、これらが東アフリカ牧畜民に共通してみられることが実証的に明らかにされ、「牧畜連続体」という新たな概念が設定されている。

第2部では、もともと灌漑農耕によっていたプロト・チャムスが、西方からやってきた、

たとえばオキエックのような狩猟採集民を受け入れ、その後マサイやサンプルなどの近隣のウシ牧畜民と接触しながらある時期急速に牧畜化し、その後貨幣経済や学校教育の浸透に伴い、脱牧畜民化してゆくという歴史的過程がダイナミックに描かれている。

ここでもスペンサーは、年齢体系を指標とし、各年齢組ごとにその生業構造の変化を記述している。これをみる限り、チャムスは数世代の間に農耕から牧畜へと劇的にその生業構造を変化させているが、牧畜が重要であった時期はほんの2~3世代の間だけであった。

第2部の中心となる主題はやはり長老と戦士の対立である。年齢組の更新期に高まる長老と戦士の緊張関係のなかで、長老たちの持っている知識や技術は青年である戦士たちの疑いの目にさらされ、彼らが長老になるときに改変されてゆく。年齢体系に基礎をおく東アフリカ牧畜民諸社会における「伝統」は、このような繰り返しによって不断に更新されてゆく弾力的なものであるというのがスペンサーの主張である。貨幣経済の浸透や学校教育の普及といった近代化の波にさらされたときにも、そうした状況への対応のための判断・知識の源として、長老支配による年齢体系が機能していると彼はいう。

年齢体系を手がかりにチャムスの近代史をたどった後、第3部で我々は再び現代に戻ってくる。近隣農耕民の進出によって降水量の少ない劣悪な環境に追いやられたことで、現代の牧畜民の多くは危機に瀕している。第1部で「鋸刃状の推移」と名づけられた家族と家畜群の発展サイクルは、いまや恒久的な早

魃によって破滅に向かっていくかのような「右肩下がり」の鋸刃状の推移」になっている。また、貨幣や賃金労働といった資本主義経済の浸透によって、成功者とそれに乗り遅れたものの格差は、それまでの長老支配によるものとは異なる形での経済的不平等を生み出している。劣悪な環境下に追いやられ、それでも牧畜をおこなっている人々こそが、過放牧によって砂漠化を進行させているのだという報告もある。こうした状況を見る限り、「もはや牧畜民は砂漠に消えていくしかないのか」と、ここまで牧畜社会の弾力性を評価しようとしてきたスペンサーが思わず書いてしまう気分もわからなくもない。

確かに、東アフリカ牧畜諸社会が現在大きな変容を経験していることは動かしがたい事実である。たとえばチャムス社会では、1980年代には慢性的な食糧不足や、灌漑部門で働く賃労働者とそうでないものたちの間の社会的な不平等、若者の伝統への反逆などがみられた。いまや牧畜的伝統は資本主義経済に接合しているが、そうした牧畜社会にとっての「新参者」である資本主義経済も、こうした「僻地」ではそれ自体破綻を来たしている。このような将来が約束されない場所で生存しつづける以上、彼らにとっては、資本主義経済ではなく自らの「伝統」のもつ弾力性への信頼こそが重要なのであると、スペンサーはかろうじて結論づけている。

残念ながらスペンサーといえども、本書を

通して牧畜民の将来に関して十分な展望を提示しているとは言い難い。それは第1部、第2部でのスペンサーの冴えが第3部では明らかに失速してしまっていることから如実に伺える。しかしながら本書のもつ第1の意義は、従来の東アフリカ牧畜民研究を「一民族主義的」民族誌や「一産業主義」的民族誌から解放した点だと言えらる。同時にそれは、地域研究という問題関心においても有意義である。「牧畜連続体」という地域把握のこころみは、牧畜民を他の生業あるいは民族と有機的につながった連続体としてとらえ、タコツボ的な民族誌から脱したメタ・エスニックな枠組みで「地域」を見ていく視点を開く。こうした視点は、冒頭で述べた現代の東アフリカにおける牧畜民をとりまく問題に注目するときに、有効な枠組みを提供するものであると私は確信している。

#### 引用文献

- Gulliver, P.H. 1953. The Age Organization of the Jie Tribe, *Journal of the Royal Anthropological Institute* 83: 147-168.
- Herskovits, M.L. 1926. The Cattle Complex in East Africa, *American Anthropologist* (N.S.) 28: 230-272, 361-380, 494-528, 633-664.
- Spencer, Paul. 1965. *The Samburu: A Study of Gerontocracy in a Nomadic Tribe*. London: Routledge & Kegan Paul.
- . 1973. *Nomads in Alliance: Symbiosis and growth among the Rendille and Samburu of Kenya*. London: Oxford University Press.

(内藤直樹、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)